

法政大学の5年間で学んだこと

湯浅, 誠 / Yuasa, Makoto

(出版者 / Publisher)

法政大学現代福祉学部現代福祉研究編集委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

THE BULLETIN OF THE FACULTY OF SOCIAL POLICY AND ADMINISTRATION :
Reviewing Research and Practice for Human and Social Well-being :
GENDAIKUSHI KENKYU / 現代福祉研究

(巻 / Volume)

19

(開始ページ / Start Page)

3

(終了ページ / End Page)

4

(発行年 / Year)

2019-03-01

法政大学の5年間で学んだこと

社会活動家・法政大学現代福祉学部教授 湯 浅 誠

赴任した2014年の2年前、私は約3年間つとめた内閣府参与を辞任した。その3年間は、社会活動家としての私に「宿題」を負わせた。「もっと遠くの人たちにも耳を傾けてもらえるためには、もっと言葉を鍛えなければならない」と。

さまざまな試行錯誤をしたが、その一つが法政大学の就任だった。

私はずっとNPOで活動してきた。飛び込んでくる学生はいつもいた。しかしそれは、いわゆる「意識高い系」だった。学生の9割は違う。「社会問題など考えたこともない」という「ふつうの学生」に、どうすればアプローチできるのか。その人たちのリアリティはどこにあるのか。それを学ぶために法政大学に来た。

始めのころ、驚いたことが2つあった。1つは、リアペを書いてもらったところ、7～8割が同じような感想を書いてきた。「私はこれまで〇〇と書いていましたが、今日△△と知りました。これからは××していきたいです」という三段論法だった。記名欄があるから紋切り型になるのかと思って、次の授業では匿名にした。本当に驚いたのはそのときだ。再び同じ7～8割が「定型文」を書いてきた。「自分の言葉らしい他人の言葉」のフォーマットができてしまっていた。今までこれで喜んでいていた大人たちがいたのだ。

もう1つは、授業終了後に質問に来た学生の一言だ。「またおいで」と言ったら「それが難しいんですよ」と返してきた。何かが聞いたら、グループ行動なので自分だけ質問に残ると次の教室への移動を一緒にできない、それがグループに意図せぬメッセージとなるおそれがあるから、というのだった。その学生は1年生で、まだ4月だった。衝撃だった。

学生たちのリアリティは、私とは相当隔絶している——そう気づいてからは、とにかく聞くことに徹した。授業では「教えない」と宣言し、プロセス管理に徹した。何を言えばどういうアウトプットが出てくるのか、「社会問題」を切り口に、探り続けた。大学に来る週2日は頻繁に飲みに行き、話を聞き続けた。家族関係で悩む学生がこんなに多いのも驚きだった。聞き続けることで相手のリアリティを肌感覚レベルで理解しようとする方法は、ホームレス支援で身につけたものだ。「文化人類学者のフィールドワークのようだ」と評されたことがあるが、たしかに私の他者理解の基本スタンスはそこにある。私の研究室も、いつの間にか、学生相談室のようになっていった。

学生から聞き続けて丸2年が過ぎたところから、私は腕試しとして「Yahoo! ニュース個人」の連

載を始めた。同じ「貧困」のテーマで、これまでとは違った層にもリーチできる書き方を身につけられたか、確かめるためだった。「同じ人が書いているとは思えない」と、ある編集者は、それまでとの文体の違いに驚いていた。幸い連載は好評を得て2016年のアワードを得た。その年に「学生が選ぶベストティーチャー賞」もいただいた。私にとって両賞には特別の感慨がある。3年に及ぶフィールドワークもしくは「留学」の成果だったからだ。

学生たちには「悪いが、君たちがおれから学ぶよりも、おれのほうが君たちからより多くを学んでいる」と話してきた。学費払ってるのに、給与もらっている人間に「より多く学ばれてる」とか悔しくないか（笑）と。マジメな話、学生たちには本当に感謝してもしきれない。よく、このおじさんに付き合い、学ばせてくれた。

来年度以降は、また別のリアリティ、別の景色を見に行く。そんなことをしていてもキリがない？一生かかっても終わらない？——そう、私は一生続けるつもりだ。学びに終わりなど、あるわけがない。